
これはゾンビですか？ ああ、魔を食らう者だ。

二重丘吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？ああ、魔を食らう者だ。

【Nコード】

N5606Z

【作者名】

二重丘吹雪

【あらすじ】

俺、新島鋼は高校一年。実は俺、魔力を無限吸収する化け物なんです。食べるたって手から吸収してやるんだぜ。夏休み前のある日空からとんでもないスーパージョー乳の魔装少女、バジルが降ってきてああ大変。ま、俺が困難なんて食らってやるぜ！！

第一話「甲角類、てめえを食らうぜ！」

俺の名前は新島^{にいじま} 鋼^{はがね}。見た目は普通の高校一年。でも実は全ての魔力を容易く吸収してしまう呪いの両腕を持つ化け物だ。そんなチートの塊みたいな俺だが今、真上に流れ星が落ちてきてる。正直ヤバイ。俺、物語始まった直後に死ぬかもしれん。

（五時間前、）

夏休みというものとはこういう憂鬱なものかと分かった。なぜかというと、こんなにも学校が宿題を多く出したからだ！何なんだよ、この量は！？もし俺のクラスに魔王がいたら、苛ついて世界が崩壊するかもな（笑）

そう思いながら俺は一人帰り道を歩いていく。周りに一軒家が多い住宅街がある。いつも通りの殺風景だな…。

はあ…。ストレスを発散したい…。

そうだ、海に星を見に行こう！

そうすれば何かすつきりするはずだ！！

俺は速足で帰っていった。

（10分前）

俺のいつもの楽しみはこうやって砂浜の上でレジャーシートを敷き、その上で星を見ることだ。俺がいるこの町は海に少し近い。なので歩いてほしい20分くらいか。

ん？今日は流れ星か。

でもやけに大きすぎる流れ星のような…。だんだんこっちに近づいてきそうな…。

ちよっと待って。

近づいて来ているんじゃないか、あれ！

俺は物語が始まった直後に死ぬのは御免だ！

応えてくれ！生存本能！

流れ星は、気がつけばもう目の前だった。

逃げればよかったかもしれない。

俺が両手の力を入れると、俺の両腕が黒く光る。そしてそれでクロスガード！

持ってくれよ、俺の腕！

なんとかガード…「ぎゃあああああ！！」

痛てて…。

…俺の目の前には2つの突起物が…。

ちよ…これって世に言うおっぱいじゃないか

説明すると今、四つんばいになったヒロインが主人公を押し倒した所を少しヒロインを上にならした状態だった…。

「ん……」

俺の近くで甘い声がした。

「へ？きゃあああああ！！」

少女は気がついてたらしい。

「へ、変態あつちに行け！！」

少女は一発蹴りを入れ、俺から5mくらい離れた。

「に、人間は殺さないって誓いを貴様は壊す気か！」知るか、てめ

えのそんな中に病な誓いは。

俺はふと振り向くとそこには巨乳でもない、貧乳でもない、ビミョーな大きさの胸…じゃなかった、じゃなかった。

だいたい11歳くらいの容姿、赤い髪のロングヘアーと青いのが特徴的なビミョーな乳女の子が裸…（ゴクリ）で仁王立ちしていた。

「何なのだ！貴様は！？第一…」

少女は威厳が高そうに何かを言おうとしたが、自らが裸だということ

とに今頃気付いたらしい。

「なななな！我に何をした！？この変態め！魔装練器で貴様なぞ一発だ！」

少女は顔を赤らめながらそう言った。そういえば“魔装練器”ってどこかで聞いたことがある。そうだ。うちに一人情報通がいたんだ。確かそいつによると…魔装練器とはヴェリエとかいうネーミングセンスゼロな名前の世界の魔装少女が変身するために必要なものだ。魔法少女って言いたくなるけど違うんだよな。元はキウウベえじゃないか。

つか俺の近くに戦争屋に奪われたガンダムのでっかい剣ようなともでかい灰色の大剣があった。

「てめえが探している魔装練器ってこれか？」

「そうだ！速く我に返せ！そうすれば一回殺しだけで許すぞ！」

一回殺すだけって残酷な天使かてめえは。俺は仕方なく魔装練器を返した。少女がそれを持つととするが触れない。

「この状態、どこかで…。ま、まさか！貴様！魔力を吸収するゾンビだな！」

何なんだこの娘。まあ魔力を食らうのは合っているが、ゾンビではない。つかどうやったらあんな繁殖力高めの生物に結びつくんだ。訳が分からん。今、ギアスが必要だ。シーツさん契約して下さい。そしてこの可哀想な娘を黙らせて下さい。

「我は知ってるぞ！覚悟してろ！」

覚悟出来る訳がない。つか魔力を吸収するゾンビがいたらそいつをゾンビにしたネクロマンサーは神だろう（笑）

とその時、地面がいきなり揺れた。いきなり激しく揺れるからこれは地震じゃない。これは…

『ふあっ！ふあっ！ふあっ！』

地面から大きな赤色の学ランを着たヤドカリが砂しぶきをあげて出てきた。つかこれ將軍キザミじゃねえの…。

「あ、あれはメガロ…しかも突然変異種！？なぜなのだ…？」

少女は驚きを隠せない様子だった。俺にはこんなモンスターハンターの初期モンスターみたいな奴なんて怖くない。

『ふあっ！ふあっ！ふあっ！君たちが魔装少女か。』「は？君たち？」

「ふあっ！ふあっ！ふあっ！そうだ！少年少年よ！」
「どういうことだ？」

まさか少女と接触した時に魔力を奪ったのか、この呪われた手で…

「奴はクラブタイプのメガロでAAA+型だ！！逃げろ！！」

「逃げる訳ねえだろ？」

「格好つけるな！人間！」

「俺は人間じゃない…。」

「え？」

「俺の名前は鋼。てめえの名前は？」

「バジル…。」

「じゃあバジル。てめえに学ラン一つプレゼントだ」「俺は捕食者だ！見てろよ將軍キザミ！俺はてめえを補触する！！そしてその学ランでこいつの着替えを確保する！」

『ふあっふあっ！面白い奴だ…。くらえ！水圧ビーム！』

甘いね。

俺はビームを右手のひらで受け止めて消した。この手、たまには役に立つんじゃないかね？

『ふあっ！？』

ヤドカりは驚いて土に潜ろうとした。

「逃がすかよ！」

俺はヤドカりに走って接近した。ヤドカりはハサミでこちらを挟んできたがなんとか左手で抑えた。

「てめえを…触す！」

自分の右手に力を溜める。そして力を溜めて黒いオーラをまとった右手でヤドカリの触角らしきもので掴む。

『ふああああああああああああああっ！！』

ヤドカリは触角からだんだん粒子になり最終的には体全体が粒子になった。そしてバジルが驚いたような顔で言った。

「貴様は…？」

「俺か？俺は魔を蝕む者、ハンターだ。異議は受けない。」

俺は魔を蝕む者、ハンター…。

異議は誰からも受け付けないぜ。

第二話 「鍋で世界は平和になりますか？」 「いいえ、下ネタ祭りになります。

おい！鋼！一話のまえがきが無いぞ！せつかくのチャンスを逃しお
つて…。我が先にやるぞ！べ、別に時間稼ぎなんかしてないからな
！！

第二話 「鍋で世界は平和になりますか？」 「いいえ、下ネタ祭りになります。」

結局帰ってきたのは9時くらいだった。キザミを倒した後、バジルが傲慢すぎる態度でただでさえ重い大剣を持って忙しい憐れな俺に「我を貴様の住みかに泊める！」とか生の体に学ラン着ながら言っていた。可愛いからいい。どうせなら萌えさせてもらおうか！ははは！はははは！とかエロチックなことを考えていたらバジルから肘うちを食らっちゃった。

「狭い住みかだが良さそうな所だ！！鋼！早速だが腹が減ったぞ！」もう率直に申し上げましたね。ご飯にしましょうか。今日は夏野菜のカレーにしようかな。星を見る前に買っておいた野菜を使ったカレーだ。そういえば何か原作と流れが似ているけどもいいのか。後はもう一人のヒロインが登場…

「おや、いい匂いだね。今日はカレーだと予測できる。」

ためえが来るか、この糞眼鏡。この空気が全く読まないでリビングに入ってきたこの髭が長く髪もボサボサのけーわいニートやろーは俺の伯父のフランク。外人かというところではなくてこの名前は本人いわくコードネームである。いつも凄い発明をするところは頼もしいがウザイ。こいつがメガロとか魔装少女とか教えてくれた張本人で、昔悪魔男爵の第五の弟子であったとかなんとか。今、バジルが着ている着替え…つかコスプレに近いスカートの短い制服はこいつが提供してくれた。ある意味末期だ。

フランクがバジルの向かい側に座り何やら話しかけた。

「凄いよ！鋼！僕の実験台を持ってくるなんてさ！君も駄目人間じゃないんだね！」

おいおい。バジルは糞眼鏡のために俺はバジルをお持ち帰り…いや泊めた訳じゃない。

「我は実験台にはならんぞ。」

バジル、そうだ。キッパリ断われ。

「じゃあさ、このヴェリエで大人気のブラックファイヤーあげるから実験台になつてくれるかな？」

何だよブラックファイヤーって。ブラックサンダーじゃないのかよ。そんなのバジルが引つ掛かる訳が…

「我は体をいじられるのはやだが、ブラックファイヤーは欲しいのだ…」

迷つてやがるう！！フランクがバジルに顔を近づけた。そろそろドクターストップかけないとカオスなことになるな…。

「トマト鍋出来たぞ！」

「早速夜飯にしようではないか！」

「ご飯遅いよー、鋼ー、」

ふいふい…良かったあ…

自己紹介などの話をしながら鍋を完食した。鍋で戦争を終わらせることなんて出来るかなーなんて考えてみたり。

「うむ！鋼の飯はヴェリエの飯より旨かったのだ！」姫様ご満悦の様子。

「前回のデータからすると今日の料理はいつも通りさ。」

「てめえにゲイボルクで刺してやるーか？」

「お断りするよ。第一に君は今、ゲイボルクを出せるかい？君は英雄王ではないのに」

「ぐぬぬ…」

流石は内職ニート。品が違い過ぎる！

「ところで…」

「ん？」「ん？」

フランクの真面目な口調に俺とバジルは思わず反応してしまった。

「バジル君、君は魔装少女なんだよね？」

「うむ！」

「バジル君、僕は鋼が奪った魔力を取り戻すことが出来るよ。」

「本当か！？」

「それは良かった。じゃあ魔力を取り戻したらヴェリエに帰るのか。」

「

「違うぞ」

「へ？」

「我はメガロの変異種を全滅しにこの腐った世界に来たのだ。」

こんな時間を稼ぎ感満載の展開を作った作者は後で俺に還ってもらおうか。そんなことはいい。大事なのはバジルの魔力を俺から抜き出すことだ。

「話を戻すが、俺が奪った魔力を戻す方法ってあるのか？」

「ああ、あるさ！その方法とは■ナニーをすることだ！」

「■ツクスかよ！大体二話目から下ネタ全盛期かよ！」

「■ナニーとか■ツクスとかとやらは何なのだ？」

「てめえにはまだ早いことだ。」

俺はバジルに見られないようにさりげなくフランクの尻の穴にでかい魔装練器を差し込んだ。

「ごぼおあっ！」

フランクは倒れた

「だ、大丈夫か！？」

バジルが心配している。一応偽事情をバジルの頭に入れておくか。

「あのな、バジル。フランクはお腹いっぱいになると倒れる癖があるんだ。そつとして置けばじきに治るさ。」

ここまでは完璧なはず……

『おい、小僧。我が主に変なことを吹き込むんじゃない。』

どっからかこつつそうな男声が……まさか！こいつのサーヴァント！？まさかFateの二次元創作までやるなんてな

『私はフランクとやらの尻に差し込まれてるぞ』

まさかのまさか！？剣が喋ったなんて驚かないぜよ！

『貴殿は感情が鈍いな』

心を読まれたー！

「おお！起きたか！エクステリアよ！」

『おはようございます。我が主よ。』

バジルが糞眼鏡の尻の穴からエクステリアを引き抜き、手に取って話をしていた。つか、さっき触れなかったんじゃないの！？

「やはり…か」

「なんだ？下ネタ糞眼鏡」

「君とバジル君は魔装練器を通して魔力を共有出来ると！」

「どういうことだ。」

「君は魔力を急激に吸収出来るよね？」

「ああ。」

「急激に吸収出来るということはすなわち、急激に排出も可能って訳さ！」

「訳がわからない。」

「君を掃除機に例えると、一気に限界までゴミを吸ったとする。そうした時君はどうする？」

「中のゴミを棄てるが」

「その原理と同じことだ！」

「つまり、俺の中にも魔力の限界量があつて限界量を超えると自動で魔力を排出すると」

「その通りさ！それで君がバジル君の魔力を吸収した時、自動的に排出された。その排出された魔力を魔装練器が受けとった訳だ。」

確かにそうだ。メガロとかいうキザミと魔装少女とかいうバジルの魔力を一回に吸収したらとんでもない量になるな。

「成る程な。そういう訳か。実にユニークな人間だ！」

バジルさんいつの間に聞いていたんですか？ヒロインのあなたが地獄耳だと何だか不快だよ。

『別に問題はないだろう』

エクステリア ああ！心も読まれたよ！

気がついたんだが、二話の時点でヒロイン一人ってどんな二次元創作だよ。もうおかしいよ。

『心配することはない。あらかじめフラグは折っておいた。』

余計なお世話だよおおお！！！！！！！！！！

第二話 「鍋で世界は平和になりますか?」「いいえ、下ネタ祭りになります。

まえがきを書き忘れたな。こんばんは、新島鋼だ。せつかくこの小説を読んでくれたのに一話のまえがきを書き忘れてすまない!以後気をつける。

そういえば最近戦場の絆で小尉になったな。それで…。おい、バジル。何を…

(文章残量がきれました)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5606z/>

これはゾンビですか？ ああ、魔を食らう者だ。

2011年12月19日21時47分発行